（別紙4）　　平成　25　年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	2375700693		
法人名	有限会社米澤福祉会		
事業所名	グループホーム「よつ葉」		
所在地	愛知県知多郡南知多町内海字南側26－1		
自己評価作成日	平成25年11月13日	評価結果市町村受理日	平成26年2月12日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人なごみ（和）の会
所在地	愛知県名古屋市千種区小松町5町目2番5
訪問調査日	平成25年12月9日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

よつ葉では個別支援に力を入れている。事業所は利用者一人一人の「生活の場」と捉えることで、画一的ではない、個人の特性や個性、そして生活リズムに合わせた支援を行えるよう心掛けている。例えば、これまでの生活で習慣としていたことが、入所後も継続できたり、なじみの場所へ行きたい時に行けるよう、ご家族の協力と理解を得ながら支援している。移転後、間もなく2年を迎えるが、この地域住民の方々のの温かい支援を受け、サロンへの参加やお祭り行事、防災行事などにも参加させていただいている。「地域密着型」という点を重要にとらえ、事業所と地域だけの関係ではなく、よつ葉で生活する利用者、職員一人ひとりが地域とつながりが持てるよう環境作りに努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

毎日を自由に穏やかに、入居以前からのままの、その人らしい生活を送っていただくことを念頭に置いて支援している事業所である。園芸や飼育、家事等の得意分野を生活の一場面で活かしてもらうことや、寺参りがしたい、コンサートへ行きたい、海が見たい等の個々の思いを個別に支援することを重んじており、入院中の利用者を自主的に見舞う等、利用者に寄り添い、身近に感じている管理者はじめ職員によって実現されている。
家族へ綿密に報告し、通院の付き添いを依頼し連携したり、行事や運営推進会議への参加を促す等、月一度は面会出来るよう工夫している。家族の来訪が増し、ホームへの理解度が深まっている事は、家族アンケート結果からも読み取れる。地域へも、積極的な行事参加や働きかけで、助言を得ながら協力関係強化に取り組んでいる。職員と利用者が各々好みの場所で談笑する姿が見られ、利用者の笑顔や活気から、ホームの取り組みが確かに実践され、反映されていることが伺える。家族、地域の中で日常生活が送れるよう、常に向上を目指している事業所である。

V．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）		1. ほぼ全ての利用者の
		○	2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）		1. 毎日ある
		○	2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）		1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
		○	3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）		1. ほぼ全ての職員が
		○	2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての家族等が
		○	2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	外部評価 次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	住み慣れた地域で自分らしく生活できることを大事にし、支援している。勉強会を行い、理念について話し合う機会を設けている。	職員全員で、実現できている理念とできていない理念は何か、どうしたら実現し、充実するかを話し合い、確認し合っている。具体的には、よつ葉の各利用者が地域と関わりを持っていこう。個別支援の実現のためにまずは職員個人を覚えてもらう事から、取り組みを始めている。理念は玄関に掲示されている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	この地域に移転し、1年半が経過しますが、地域サロンへの参加、隣組に加わったりしています。また、毎日買い物に行くことで日常的に地域交流をしていると思う。	月に一度の地域サロンへ参加し、地域との交流を図っている。サロンでチラシを配り、ホーム行事へお誘いしてホームの周知、交流関係構築に努めている。隣組に加入し、回覧板は利用者が回している。毎日の買い物で外出し、近隣とも顔なじみ。中学生の職場体験や福祉専門学校生の実習の受け入れをしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎日の買い物、運営推進会議の開催、地域行事への参加、ボランティア受け入れを行い理解に努めている。また、地域住民が参加できる行事の計画の開催を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	本年度は、年6回の開催予定。移転し、1年半が経つが移転前と比べ、地域の方、家族の方の参加が目立つ。よつ葉の理解につながる会として、行事報告等行っているが、形式的になっていないかが心配。	利用者家族、民生委員、町役場、施設関係者等で年6回開催。行事の報告では、その目的や結果や今後の課題を発表し、支援者としての視点を伝え、理解を得る工夫がされている。出席者から、提案や助言をもらい、例えば庭のスロープ設置等、会をサービス向上に活かしている。防災協力についても話し合われている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域ケア会議へ参加し、運営推進会議参加の呼びかけを行っている。必要な書類については、役場に行き、なるべく手渡しをするようにしている。分からないことがあれば、電話連絡をし、情報交換している。	町役場とは、運営推進会議での交流の他、相談や指導等、緊密に連携をとっている。この他、ヘルパー対象の講習会へ参加している。地域包括支援センター主催のケア会議が月に一度あり出席し、勉強会や他事業所との交流の場に活用している。県主催の研修へ、職員を積極的に参加させている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	安全策と拘束の違いについて話題が出た際、ミーティングで話し合うようにしている。利用者の安心と安全、その人らしい生活を優先し、家族との話し合いを行いながら支援している。しかしながら、「拘束とは何か」についてさらに話し合う必要がある。	勉強会を、新人入社時、事例発生時など必要時に行っている。ある事例を、利用者本位で考え、全員で結論を一致させ共有し合っている。帰宅願望の強い方には、一緒に外まで行く等、その人の思いを尊重して支援をしている。また、利用者に状況を把握し安心していただけるよう、壁にメモを貼り付け、視覚から訴える工夫をしている。玄関は音センサーの設置がある。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	スピーチロックや行動の制止につながる発言をしていないかなども含め、改めて学ぶ機会が今後も必要。基本的には、虐待が発生しないよう、見過ごされることがないように努めている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前開催したことはあるだけで、それっきりおこなっていない。町のケア会議で管理者は学ぶ機会があるので、それを職員に広める機会を設けたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	行っているが、職員のほとんどが契約の実際を分からない。契約後の書類・資料等はいつでも閲覧できるようにしているし、ミーティングでその時の様子を報告している。今後、職員がこのようなことにも興味・関心を持てるように育てる必要もある。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	電話や家族の来所時に、どの職員でも話ができるようにしている。家族も足を運びやすく意見が話せる環境にしてくれているのは従業員の力だと思う。今後もそれがさらに反映できればよい。	家族に、どの職員でも対応出来るよう、ミーティングや申し送り時に伝達、記録にサインでチェックし漏れのないよう徹底して共有している。月の利用料を、手渡しで集金制度とし、月に一度は面会を図っている。非常時用に車椅子を備えてほしい等の要望を受け、反映している。運営推進会議議事録を渡し、ホームの様子をお知らせしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	勉強会を定期的に開催するようになった。また、ミーティングを月1回は開催し、職員の意見を聞きとるように心がけている。職員の意見の反映する前に、その意見の具体性や必要性など職員とともに考えるように努めている。	全員出勤で、利用者の日常生活の一部のような自然な流れで勉強会を行っている。行事や外出の行き先やプランを持ち回りで担当して行うが、その案の目的や意義などを明確にし、共有する為、皆でよく検討してから反映している。個人面談を年に一度、行っている。	より一層の有意義なミーティングの実現のために、職員からの意見聴取の仕組みの一層の工夫、充実が期待される。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	向上心を持って働ける環境づくりを現在のテーマに職場環境の整備を行っている。これまで勉強会や研修会に参加できていなかった職員が参加できるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	現在、そのような体制作りに努めている。研修機会を設け、新人、中堅職員の育成につとめている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部のグループホームとの交流機会はあり、正職員の参加を中心としている。また、４～６月には新人と中堅職員の他グループホーム研修を行った。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	そのように努めている。また、入所したばかりの人には家族との細かなやり取りから情報を得るようにしている。家族とのやり取りは、他のグループホームの方法を参考にして、以前より三つになったと思う。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前に、見学や相談していただくため施設に足を運んでいただいている。その際、ご家族の気持ちを伺うようにしている。まだまだ遠慮しているご家族もいると思うので、より信頼関係を気づけるよう努力したい。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	職員は、利用者の生活の幅が広がるよう、ミーティングで話し合いを重ね、必要に応じて訪問入浴、往診、福祉用具レンタルの活用を行い、その際家族とも話し合いを行っている。家族へのおしつけや負担にならないように気をつけている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	掃除・調理・買い物・洗濯・片付け等は利用者が中心に行える環境として整っている。今後目指すところは、人間的豊かさやより自分らしく生活できるよう支援することである。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	「介護お疲れさまでした」という視点にこれまでは立っていたため、家族が参加できる出来ないにかかわらず、事業所ですべてを引き受けていた。しかし、ここ数年で家族参加を少しずつ呼びかけ、ともに支える環境に少しずつ向かっていると思う。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご本人のこれまでの生活が継続が、入所後も可能な限り継続できるよう支援している。そのために家族にも協力を得て、友人に会ったり、参拝、買い物などを行っている。	入居時や随時、家族からの聞き取りによって、これまでの生活や交友関係の把握に努めている。馴染みの方に対し、様々に働きかけている事で、来訪する方が増えている。利用者の様子に配慮しながら、電話の支援をしたり、来訪者に実費でホームの食事を提供する等、馴染みの方との関係継続の支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	本人の望む生活を優先させ、その中で、利用者同士が自然と助け合えたり尊重し合えるように努めている。利用者間の上下関係には職員が間に入り双方の思いをくみ取り、けんかや維持面の防止に努めているが難しいところである。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院先へのお見舞い、墓参りをおこなったり、家族に街で会えば、近況を伺ったりしている。退所後の入院の洗濯代行なども行っている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の望む生活を第一に考えている。困難な場合、これまでの生活やご家族の意向を踏まえ、支援している。その際は現状と照らし合わせており、ときには安全、快適、安心を優先させることもある。	リビングの机上に、常にお菓子や果物、お茶等を置き、いつでも飲食出来るようにしている。見える支援の実践で、好みの把握と共に選択の自由を尊重している。会話の中から、日々意向を確認している。望む生活の実現に、その日すぐに実行する姿勢がある。応用と工夫で好きなことが継続できるよう支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族の話やご本人の話を参考にしこれまでの生活が継続されるよう支援している。家具等、なじみのある物の持ち込みを呼び掛けるが、かえって自宅に帰れない不安や悲しみを生むことがあるため、慎重におこなっている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	そのように努めているが、まだまだ不十分である。特に、利用者の有する能力の活用については、可能性・前向きな支援に努めたい。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月ミーティングで話し合うだけでなく、以前のケアマネと情報交換を行ったり、また訪問看護師や医師、入院の際には病院のSWとの連携も深め支援につとめるようになった。	モニタリングを毎月、見直しは3カ月に一度を基本とし、作成には職員全員が出勤し協議する。医療関係者からの意見も取り入れ、家族とは作成前に伺い、仕上がり後に確認している。ミーティング時に新しい様式のシートを用いて内容の具体化に取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録の記入漏れ対策として、夜勤者の最終確認を行い、漏れがある場合は、次の朝の申送り時に報告するようにした。今のところ漏れは減少している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	そのように取り組んでいる。講演会やイベントの参加も年間で決めるものと日常生活の会話からくみ取って実行するものがある。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	訪問看護や往診の活用。サロンや地域行事への参加を行っている。現在災害時の避難応援について、地域住民に協力の依頼を行っているところである。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	これまでの病院への通院を促している。家族による通院をお願いしているが、困難な場合は、代行通院や往診医の紹介などを行っている。	利用者と家族との接点を重視し、家族付き添いの馴染みの医院へかかるよう促している。医療情報は家族と連携をとっている。薬の影響や管理等は、訪問看護師に相談し行っている。希望者には往診や訪問歯科も利用可能。緊急時の病院は家族の希望を事前に聞き取っており、個別ボックスに情報を集約し備えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	そのようにしている。また事故や容体の急変に備えた勉強会を開催してもらったり、利用者の現状から今後予測される心身の変化まで、丁寧に説明してもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際は、医師によってカンファレンスへの参加が異なるが、参加できない際は、家族に事業所側の意向を伝えてもらったり、手紙を書くようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事前指定書の記入をしてもらっており、事業所のできる範囲についても伝えている。ただ、終末期にならないと家族も具体的な想像はつかないため、随時確認をとりながら行う必要があると感じている。	定期的な医療が必要となるまでは入居可能で、入居時に説明をしている。ケース会議で終末期の方の支援を検討。管理者がかけつける事が出来るよう連絡体制を整えている。訪問看護師による勉強会や救急蘇生法の受講等で職員へのケアに努めている。病院で最期を迎えられた方をホームで迎えて、利用者と職員で見送りをしている。	入居時の説明や随時の確認や話し合いの工夫、対応可能な内容の明文化などで、ご本人やご家族に安堵していただける取り組みを期待します。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急隊による緊急時の対応訓練、職員ミーティングによるそれらの復習を行っている。現在の回数は年2回。さらに増えるようにしていきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練を行っている。避難マニュアルを作成し、確認している。また、災害時に応援してくれるよう、地域住民へ呼びかけを行う準備段階である。	約5日分の食糧と水、オムツや懐中電灯等を備蓄。防災頭巾を現在作成中。地震マニュアルを作成し、年2回の防災訓練の他に、地域の避難所の神社で、炊き出し、土のう等の訓練に参加している。さらしを使用した避難法や神社へのルートを利用者と共に確認している。町役場へ名簿を提出しており、となり組班長へ情報発信をし、近隣との協力関係構築に努めている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「ダメ」「いけない」などの一方的な声かけには気をつける必要がある。アルバイトや新人職員には、言葉遣いの基本と、命令や強制にならない声かけを行うよう、日々注意を払っている。	ミーティングで職員へプライバシーの配慮について伝え、現場で発見の場合は、利用者のいない場で注意をしている。入浴拒否の方に対して職員間で声をかけ合ったり、トイレの扉閉めに注意している。おむつやパッドを見えない場所に保管し、配慮している。	入居前からの生活の実現に向け、その土地独特のコミュニケーションで支援されており、今後一層の充実が期待される。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者に話を聞くようにしている。しかし、時に、職員の考えを優先しすぎることも見受けられる。一方、とくにアルバイト学生は、一人ひとりの時間を大切にしてくれるので、職員はその時間を大事にし、他の利用者のサポートができたらよい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者のペースを大事にしているが、業務的な流れも見られる。職員間の話し合いも大事だが、管理者や会社側の人間はその職員の心身のケアに努める必要がある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その方の好みに配慮した服装ができるよう心掛けてはいるが、もらいものの中から、柄や絵を無視し、着やすさ、大きさを重視し、本人の好みとは違う服を着てもらっていることもある。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は目でも楽しめるよう、内容に合わせた器や食器を使っている。薄味も大事だが、まずは美味しいと笑みをこぼす食事作りを心がけている。朝は当番制にし、昼食は多くの利用者が調理参加している。	ご飯をおひつにいれ各自で好みの量をよそっている。利用者同士や職員と会話のはずむ、笑顔あふれる食卓造りがされている。共用の冷蔵庫は出し入れ自由で、梅干し等個別で提供している。朝に嚥下体操を行い、メニュー自由日でリクエストに応えている。季節や行事時に特別メニューを、花見等の外出時にお弁当を作っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	心身等の状況に合わせて、食事の形態を変えている。食事量が落ちた時、好みのものを食べてもらったり、点滴の必要性を話し合っている。しかしそれを記録することがおろそかになっていることもある。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアはできていない利用者が多かったが、現在は毎食後の口腔ケアを促せている。歯科往診も利用し以前に比べ口腔内への意識が高まっている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	できる限り、普通の下着で過ごせるよう支援し、トイレ誘導やパットの変更を行いながら支援している。必要に応じて個別に排泄記録をとったり、ポータブルトイレを導入し、自身でできる排泄方法を模索している。	一人一人に合ったケアのために、チェックや、声かけをしてパターンを把握している。夜間も利用者ごとの間隔で声をかけ、居室のポータブルトイレ誘導やパッド交換をしている。入院から戻られた利用者へ離床の訓練をし、自立へ向けて支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝のラジオ体操が日課となっている。食事面においては、果物や毎朝のヨーグルト、排便周期が長い場合は、朝の飲み物を牛乳やバナナジュースに変更したり、水分量の記録をして排泄につなげている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者の希望に沿って、入浴ができるよう曜日も時間帯も決めていない。しかし、介助が必要な利用者に関しては、多く職員がいる時間帯の入浴となっている。またいつの間にか義務的・事務的な支援になっていることも否めない。	毎日入ってもらえるよう支援し、時間帯の希望があれば実現に努めている。楽しい入浴のために、誘導の声かけに配慮している。会話し、ゆったりとした雰囲気づくりに留意。仲の良い利用者同士での入浴もある。浴湯は状況に応じ交換や足し湯。バスマットは、利用者ごとに毎度交換し、風呂場は、共用部と温度差がないよう調整している。選択可能な飲み物で水分補給がされている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入眠時間はその利用者の生活リズムに応じている。また、日中の休憩を取り入れている利用者もいれば、休憩の取り過ぎを減らし、活動時間につなげ、夜間ぐっすり寝れる支援も心がけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	昨年に比べ、体調の変化と服薬内容を照らし合わせる様子が増えたと思う。まだ十分とは言えないが、この意識が継続していけばと思う。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴に合わせた支援を心掛けている。しかし、現状に満足しているようにも伺える。調理、洗濯等への利用者の参加は、よつ葉においては基本となった。今後は、より個人の生活が豊かになるような支援を努めていきたい。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	行きたい場所ややりたいことを、日常生活の中から伺っている。もう少し、それが反映されると望ましい。また、計画的に支援することもあれば、突発的に行動することもあり、「普通の生活」が送れるように支援している。買い物に関しては、主体的に買い物ができるように支援が必要だ。	毎日の食材の買い出し、ゴミ捨て、庭の木陰での休憩や、寺参り等、生活の一部として、日課を決めず、その日その人の様子で外出している。また、入居以前の生活の反映を念頭に置いて、個別に外出支援をしている。外出によるその人への効果や、今後への反映を、目的と計画、結果、課題の立案で、外出ごとに毎回検討している。花見や潮干狩り、文化展などに全員で出かけている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者全員で共有できる財布を作った。ただ、その財布の活用の仕方が十分に職員に浸透していないため、その財布で利用者の好物が買えるにとどまっている。利用者自らが利用し買い物の意識を高めたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の使用は自由にできるようになっている。年賀状も家族に書く利用者がいる。しかし、電話に関しては、家族の負担も考える必要があると感じている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が自由に生活できる空間とするための空間づくりをしている。台所、事務所、冷蔵庫の中など自由に使えるようありのままの状態である。共用空間は、寒さや暑さに注意したり、座りっぱなし状態を作らないように心がけている。	元々古民家のため、所々に昔風情のある造りである。畳スペースの他、リビングと別に、休憩用小スペースやウッドデッキ等、好みの居場所が選択出来る。日めくりカレンダーや観葉植物に、状況の説明をしたメモを貼り付け、視覚による認知症の周辺症状への工夫が見られる。施設横の畑では、利用者本位で野菜を栽培、収穫をしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間を2か所に分けた設計である。座りっぱなし、あるいは座らせっぱなし状態であることに気づくよう職員も意識している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	なるべく自宅で使われたものを持ちこんでいただくよう契約時に説明しているが、一方でそれが、自宅に帰れない不安等を招く心配があることも説明し、判断は家族に委ねている。職員は、もう少し、片つけに配慮の必要あり。	窓の高めの配置で安全への配慮があり、押入れの戸の排除で私物の確認が出来る。持ち込む物に制限はないが、持ち込んだ物によって不穏にならないよう気を配っている。照明は、昔ながらに引きひもスイッチのものを導入し、利用者が自由に操作出来る。入口ののれんでプライバシーに配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	標識・手すりを活用し自分で判断したり、行動できるように工夫はしている。また、個々人によって異なるが、居室にポータブルトイレを用いて排泄の自立につなげている利用者もいる。		

（別紙4（2））

事業所名 グループホーム　よつ葉

目標達成計画

作成日：　平成　26　　年　2　月　4　日

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。
目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】

優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	33	日常的に医療が必要になったり、痛みや苦痛の緩和への対応ができないため、そのようなことが必要になった場合、入院という形を取っているが、家族への説明が不十分ではないかと不安がある。また、最期までよつ葉で暮らせるような工夫や提案を家族と話し合えればと思う。	ご本人、ご家族とともに終末期ケアについて考えて行く	まずは、ご本人、ご家族の要望を伺う。よつ葉での現状体制について説明する。基本的には、入所j時の事前指定書に沿って話し、その場面に直面した場合に再確認していく。必要な医療、福祉用具なども一緒に検討して行く。	12ヶ月
2	25	一人ひとりの生活歴の把握、生活スタイルについては、モニタリング等で再確認しているが、日々の生活の中で、十分に生かし切れていない。特に、自発性のない利用者への取り組みが必要。	ご自分の意志表現ができない利用者さんに対して、本人の希望通りの生活ができているか考える。	意思表示ができない利用者の情報収集として、本人とゆっくり過ごす時間を持つ。また、ご家族の来所時にこれまでの生活の様子を伺う。買い物や、散歩を一緒にすることで、本人の目の引くもの、興味ごとに気をつけて見る	6ヶ月
3	43	排泄状況の把握はできているが、布パンツが濡れるとかわいそうだからという理由で、リハパンにするほうがいいのではないか判断し、リハパンになることが見られる。「快適」と「自尊心の尊重」両方の意見があり、その両方が合致するためにも話し合いを深める必要がある。	利用者の自尊心を尊重し、快適・心地よさ・能力維持も含めた話し合いを重ね、実践につなげる	ミーティングの機会を活用して、目標達成に向けて取り組む。	3ヶ月
4	4	運営推進会議の開催は、今年1年順調に開催できているが、正直不安定にある。また、開催内容が同じであり、もう少し工夫と、他の職員の関わりも必要である。	運営推進会議の工夫をし、他のsyく員も参加できる会議にする	2カ月に1度の開催を行い、地域、家族の参加を促し、よつ葉の現状を知っていただく。写真などを用いて日常のよつ葉の様子がもう少しわかるように工夫をする。また、行事報告では、他の職員の発表も行う。	3ヶ月
5	36	排泄を失敗した際、ほかの利用者にも聞こえるほどの声をあげてしまうことが見受けられる。また、「〇〇さん便出た？」という会話が日常的に見られ、職員も配慮しなければいけないという意識が低迷している。	自分の発言に注意し、一人ひとり気をつける	職員一人一人が意識をし、心がける。ご本人へトイレ誘導する際は、やむを得ない時もあるが、ご本人に気づいていただけるような声かけと、周囲に配慮した声かけに気をつけるようにする	1ヶ月

注）項目の欄については、自己評価項目の№を記入して下さい。項目数が足りない場合は、行を挿入してください。